

めぐみ厚生センター恵友会 会報

郵便振替 めぐみ厚生センター恵友会 口座番号： 01770-6-12389
 事務局 〒840-2223 佐賀市東与賀町大字飯盛1584 (めぐみ園内) : tel 0952-34-7722

第 302号

めぐみ厚生センター恵友会

法人事務局	0952-63-0107
めぐみ園	0952-34-7722
富士学園	0952-63-0107
ウイズ富士	0952-51-0063

発行人 副島 勉

医師不足が深刻化していた1970年代前半、文部省（当時）は、「無医大県」解消をうたい、「一県一医大構想」を打ち出していた。佐賀県内の医師不足も深刻であった。さらに、がんや高血圧疾患は全国ワースト上位を占め高度医療が求められていた。1971年8月に当時の佐賀県知事の池田直を会長とした「国立医科大学誘致促進期成会」が発足。1974年8月佐賀大学に創設準備室が設置され、九州大学医学部長だった古川を準備室長として迎え入れた。古川は1921年長崎県で医者の二男として生まれた。東京帝国大学医学部を卒業後、九州大学第一外科に入局。麻酔領域の先駆者として活躍。九州大学初代麻酔科教授になり、麻酔の学問的確立はもちろん中央手術部、集中治療部を設けるなど全国に先駆けて手腕を發揮した。準備室長となつた古川は佐賀県



私の恩師「古川哲二先生」

学校法人 福岡女学院 理事長
 佐賀大学 名誉教授
 めぐみ厚生センター 恵友会 会員

十時 忠秀



内の医師確保と地域医療の確立の命題を果たすために、地域の実績調査に取り組んだり、日野原重明先生と米国やカナダを訪問。新旧の医学校を視察し新しい大学の構想を練つた。

1976年10月佐賀医科大学開学、1978年学生受け入れが決定。

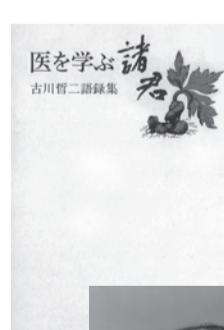


初代学長、古川は目を閉じて、古川は受け入れが決

他の中堅医大が既存の大学の踏襲で「ミニ大学化」している中、古川は「ミニ九州大学なら佐賀医科大学の生きる道はない」と断言して独自色を打ち出した。「赤ひげ先生」を作りたいが口癖であつた。

文部省は古川の取り組みを一古川実験大学」と評した。古川は学生に繰り返し語り続けた。
 「患者さんが先生である」。
 「君たちは良い医者である前に立派な人間であつてほしい。そのためには幅広い教養を身につけて、人間にに対する深い理解を持つよう努力してください」。
 先見の明がある古川でもあります。国立大学が法人化する20年前から「国立大学は一部法人化した方が良い。それが活性化に繋がる」。先を見通す目は畏怖を感じるほどであった。

1988年3月31日、自分でも決めた学長任期規定に従い、惜しみながら大学を後にした。



過剰な細分化を避ける大講座制度、「小論文・面接」による推薦入学制度をいち早く導入した。病院は診療科別ではなく「一患者一心ルテ」制を取つた。一元管理することで再診患者の留意点が一目で分かる。検査の重複や投薬時の副作用を避けるためである。大学病院としては高度の専門医療だけでなく、一般的の患者を幅広く受け入れる「総合診療科」を設け全国の注目を集めた。

「教育、診療に患者から学ぶ」を重視した。

「教育、診療に患者から学ぶ」を重視した。

